

# Fabián y el caos

タイトル	ファヴィアンとカオス Fabián y el caos
著者	ペドロ・ファン・グティエレス Pedro Juan Gutiérrez
出版社	アナグラム
出版年	2015年
ページ数	240ページ
読者対象	一般
レポート作成	高際裕哉

## 主な登場人物

ファビアン：主人公  
ペドロ・ファン：ファビアンの友人  
ロベルト：ファビアンの恋人  
フェリペ：ファビアンの父  
ルシア：ファビアンの母

## あらすじ・内容

本作品は5章立てで構成されている。

第1章は、主人公ファビアンの父と母の物語である。ルシアは1905年、マドリードで生まれ、トレド近郊の村で牧畜業を営む両親のもとで育つ。18歳のころフェリペと知り合い、二人はすぐに結婚を決意する。相手のフェリペは29歳だった。二人は結婚したのち1927年、キューバで衣料品店を経営する叔父をつてに、キューバにわたる。キューバのマタンサスで二人の日々は順調に過ぎていく。フェリペは商売に精をだし、ルシアは主婦をしていたが、退屈を紛らわせるため近所の幼稚園でピアノ係として働く。フェリペはルシアには内緒で、逃亡奴隷で街へ逃げこみ、売春で生活を立てる娼婦と週に一度の性交渉を持ちながらも、ルシアとの生活に変化を望まず、子どもも作ろうとはしなかった。1949年、二人は期せずして子供を授かる。ルシアは44歳、夫のフェリペは55歳だった。1950年、ファビアンが生まれる。フェリペは順調に商売をつづけ、街のライオンズ・クラブ、ロータリーなどの名士の団体へ足しげく通いだす。そのような順風満帆であるかのように見えたフェリペとルシアだったが、1959年、キューバ革命が起こり、生活の中に社会主義という災厄が入り込んでくる。財産の没収や商業の制限などで、彼らがなした財は家を残してほとんどなくなってしまった。

第2章はファビアンの友人、マチョなペドロ・ファンの物語だ。中学校に入り、カヤックにのめりこみ肉体を鍛えたペドロ・ファンは学校のスターになり、女の子たちのあこがれの的となる。しかし女の子たちはまだ純潔という価値観にとらわれており、身体を許そうとはしない。そのためペドロ・ファンは年上の女性と性的関係を持つが、16歳を迎え、兵役に就かなければならないため、女性と別れる。

第3章に至りようやく主人公ファビアンが物語の中心に登場する。ファビアンは革命初期に亡命者が残っていたスタインウェイのピアノを母に与えられてピアノの練習にのめりこみながら幼少期を過ごす。父親は文化に興味がなく、息子が男らしく働けるよう、稼業を覚えさせようとするも、ファビアンは商売や世間のことにまったく不器用で、父親は息子に落伍者としての烙印を押し、息子を相手にしなくなる。そのことでファビアンは家族や社会への心を閉ざした。ファビアンは徴兵検査を受けるも運よく落第し、希望だった音楽学校へ進学する。その生活は厳しく、一日中練習に明け暮れさせられた上に、ライバルとの競争を強いられるが、ファビアンは熱心に音楽に打ち込む。

とある折、近所のドサ回りのラテン・バンドから声がかかり、ファビアンは目先のカネ欲しさにカーニヴァルの時だけバンドに参加する。そのバンドは人気が高く、ファビアンもその中で、かねてから培ってきた音楽の才能を開花させる。ピアニストとして人気を得て、ボレロを数分のうちに作詞作曲してバンドのレパートリーを増やし、巡業に行ったバラデロのビーチで、ホテルで働く無教養な男、ロベルトと恋に落ちる。ファビアンは内気な上に同性愛者であった。しかしバンドのリーダーが巡業公演のすきを狙ってマイアミに亡命し、ファビアンとロベルトは海岸で警察に公序紊乱の疑いをかけられ逮捕される。ファビアンは17歳だったためロベルトは年少者との性的な関係をもった罪を着せられる。ファビアンは何とかおとがめなしで音楽学校に戻っていく。

第4章は、ペドロ・ファンの視点から語られる。1966年から4年間兵役につかされた彼は、軍で課せられた理不尽な作業に心を病み、放埒な性生活に明け暮れ、ニヒルな態度で社会と接していく。除隊後、1970年、ペドロ・ファンに課されたのは、豚肉の缶詰工場の建設労働者としての仕事だった。建設作業の横で行われるのは豚の屠殺だった。屠殺の進め方は合理的なものからは程遠く、豚は殺される前に暴れ糞尿を漏らし、その中で労働者がサディスティックに豚を屠殺していく。糞尿と血まみれの屠殺場は陰惨なものだった。そんな工場の一角で、缶詰工場働く女と男たちはすきを見計らっては性行為に耽っている。労働者たちは朝の6時から夕方5時まで働き、できるだけ仕事をせずに、仕事あがりに豚肉を盗み、帰っていくという生活をしている。工場の建設には北朝鮮からやってきた技術者たちが指示を出しているものの、建設従事者たちは一向に働こうとせず、当初の計画から遅れること14年後に工場完成が見込まれる始末だった。ペドロ・ファンは工場のかたすみにファビアンを見つける。ファ

ピアノは文化部門に従事するには不適合だと言われ、工場労働者として働くことを課されていた。キューバではU MAP（生産援助軍事行動部隊）

名前の上では1968年に解散されたことになっているが、解散されたのちもキューバでは似たような下放は存続されたと言われている）という、社会主義からは不適合とみなされた同性愛者、反体制文化人などが下放される部隊が存在し、そこに回されることは人生の終わりを意味していたが、ファビアンはUMAPに回されることなく、工場労働者に回されたのだった。

第5章は、作者の語りを通じて、ファビアンが労働者たちに同化できず、精神を病んでいくさまが描かれている。労働者階級は無知で粗野に映る。ファビアンは工場のボスに目をつけられ、性交渉の相手にされ、その快樂にあらがえずにいる。その生活の中、家庭での暮らしは荒廃しており、10年前に患った脳の病気で父親はほとんど生活能力をなくし、母親も父親に付き添い泣いて過ごす。ファビアンは二人を冷酷にみはなし、二人の居場所を家の隅に追いやり、面倒を見ることもしなかった。ファビアンは両親を老人の養護施設に入居させようとするも、国家が運営するところはどこも数年待ちであり、頼るのは教会の施設しかなかった。2か月後、教会から通知が届き、ファビアンは母の反対を押し切り、おびえる父親を養護施設に連れて行く。その場所で父は息絶え、そのショックで母親も命を落とす。ファビアンに愛情を注いでくれた母だったことを思い出し、ファビアンは自分のしてしまったことの残酷さに驚き悲嘆にくれる。食事もしなくなり、家で錯乱状態に陥り、長い間触っていないかったピアノで数時間にわたるシンフォニーを弾き続ける。その中食事もとらなかったファビアンは力を失いやがて息絶える。ファビアンの腐敗した死体をペドロ・ファンを見つけ、物語が閉じられる。

### 所感・評価

ペドロ・ファン・グティエレスはキューバ国外、とりわけヨーロッパで評価を獲得している中堅作家である。代表作として「ハバナの汚れた三部作」(1998)

で知られている。日本語で翻訳されてもおかしくないほどの作品だったと言われている。その作家が2015年に出版した自伝を交えた小説である。

キューバは今、転換期にあるが、この作品は革命直後およびその後数十年にあった同性愛者に対する抑圧、かつて財を築いていたものに降りかかった災厄という革命時代の負の遺産が前面に出されている小説である。小説のエピグラフには、ヒューマニティを歌のテーマとして掲げ、革命に奉仕した音楽ムーブメントであるヌエバ・カンシオンの旗手、パブロ・ミラネスと、友人のシネシオ・ロドリゲスへの謝辞が付け加えられている。作者と歌手は友人だったようだ。また、この小説が持つ内容を考えると、かつてのヌエバ・カンシオンの代表的な歌手が、この作家の小説に協力したという事実は興味深い。以下、小説とその時代背景について一瞥し、作品の持つ意味を考えてみたい。

トマス・グティエレス=アレア監督によって映画化もされたエドムンド・デスノエス著『低開発の記憶』（1969）は、1959年のキューバ革命以降の主にキューバ危機を扱っているが、当時の社会主義への国際的な熱狂や、社会主義体制の限界をブルジョワ青年のシニカルな視点から語っている。一方、本小説は転換期キューバにおける負の記憶を、作者ペドロ・ファン・グティエレスが経験したことをもとに再構築し小説に結実させた作品で、彼の友人で音楽の才能にたけた「ファビアン」の人生にささげられている。

本作品はキューバ革命以前のスペインからの移民の立身出世の物語と、革命後、彼らの息子たちが子供時代を通じて青年期に革命をどのように経験したかという、比較的リアリスティックな筆致で紡がれた物語である。第2章から第3章まで、革命直後のキューバが思春期の青年の視点から比較的牧歌的に描かれるが、第4章、第5章の工場の記述は陰惨を極める。

この小説の構成はよく練り上げられているように思われる。第1章ではスペインからキューバに1927年に移民してきた夫婦の様子が、革命以前のキューバの空気とともに語られる。これはファビアンという主人公を描くための前置きとして機能しているが、革命前にキューバに渡ったスペイン人移民の夫妻の物語として独立して読むことができる。第2章から第3章はその子供たちが革命以降どんな思春期を過ごし、青年になっていくかという様子を恋愛模様も絡めて物語る。日本においてもそうだが、中学校という場は往々にして抑圧的な場であり、そこには厳しいスクールカーストが敷かれ、些細なことで決定的に権力関係が決まってしまう。そこで音楽青年のファビアンは周囲との関係を断ち切り、放埒なゲイの同級生とも距離を保ち、存在感を消したまま過ごす。ファビアンが集団の中で自らの存在を消したかのように過ごしていたことは作品中で折に触れて語られている。第3章ではそのファビアンも音楽の才能が鍛えられ、そのことで束の間の幸せな時間を過ごす。パラデロで知り合ったロベルトという農村から出てきた青年との出会いとその恋愛模様の記述は素晴らしい。

ジェンダーと恋愛記述は20世紀文学・映画が挑戦してきた課題の一つである。特にマチスモの規範が強いラテンアメリカにおいては、こんにちLGBTと呼ばれる人々が社会的な認知を獲得するために文学や映画が多大な役割を果たしてきた。その中でも社会主義体制を取り、ジェンダーロールを社会規範のみならず、体制の中に組み込み、同性愛者を異端として社会から排除しようとしてきた革命後キューバの歴史は大きなテーマとして取り上げられる。日本でも映画『苺とチョコレート』（1994）が人気を博し、同性愛者であるがゆえにキューバを去らなければならなかった文学の鬼才、レイナルド・アレナスの『夜になる前に』（安藤哲行訳、2001年）は評価を受けているし、アレナスが残した超人的な文学的遺産『襲撃』も日本語読者に届けられたばかりだ。（山辺弦訳、水声社、2016）。



この作品もその系譜からは外せない。『ファビアンとカオス』を読んで筆者が感じたのは、第3章で作者が同性愛者の恋愛模様を記述する際に、ことさら異性愛と異なる世界としてではなく、それ自体恋の一つの物語としてみずみずしく描いている点だ。恋は比較できるものではなく、それ自体単一かつ特殊な経験であることには違いない。その牧歌的な景色も、第4章、第5章の豚肉の缶詰工場の話へ移ると記述が一気にエロ・グロへとシフトし、社会主義体制の中にはびこるナンセンスをこれでもかと記述していく。豚の屠殺、労働を課されても働かない労働者、北朝鮮からの技術支援者たち、豚肉缶詰工場の豚の糞尿と血にまみれた屠殺場での労働者たちの放埒な性的関係など、グロテスクと叫ぶほどの苛烈な労働環境を描写する。

文学に、党の政治方針に奉仕する社会主義リアリズム、あるいはその先駆と言えるプロレタリア文学と呼ばれる潮流があったとしても、その記述はイデオロギー的な規範を逸脱し、グロテスクなものの記述へと図らずも寄る傾向は世界的にみられる。小林多喜二の『蟹工船』がそのよい例だろう。革命後のカオス状態にあるキューバで、下放のような扱いを受けたインテリ層が、労働者階級との社会的環境の違いを知って啞然とするさまが描かれた本作品は、体制側への罵詈雑言というよりも、社会主義体制が持つシステムの限界と、そこから生じる理不尽に対する怒りを訴えた社会的な小説といえるし、そのグロテスクさをこれでもかと記述に盛り込んでいる。

豚の屠殺場の記述は筆者としてはややグロテスクな記述に露悪趣味が読み取れた気がしたし、作品内での効果を狙うため、現実とはやや異なるものを描いているのかもしれない。その真偽のほどは筆者の力では確認しようがない。また、日本の文脈とキューバの社会状況とは異なるかもしれないが、このことに関して抵抗を持つものも少なくないと考えられる。以下のように缶詰工場が描かれるか、少々きつい表現交じりではあるが、作品の性質を理解してもらえよう試訳で提示した。

この小説は例えばレイナルド・アレナスの作品が持つ文学的な爆発力とはまた異なった、(小説内ではレサマ・リマを反革命分子とする糾弾、ビルヒリオ・ピニェーラに対する抑圧、パディージャ事件に対する言及も当然あるが)社会主義国キューバがもっとも厳しい時代に体制がはびこらせた抑圧を、才能を認められることもなく、結果的に革命体制に絶望して死んでいった友人の死という個人的な記憶をもとに紡いだ時代の記録としての側面を持つ小説だ。米国との国交回復交渉が行われ、国交が回復される直前の2015年に出版されたことにも意味を持つ作品なのではないだろうか。

本作は、世界の冷戦構造に巻き込まれた革命後のキューバ政府が引き起こした混乱を、作者視点から描いている。筆者は本作を読んだ後に頭を抱えてしまった。キューバは理想郷としてステレオタイプ的に語られることがままある一方、当然この世には理想郷などなく、キューバもまたその問題を抱えているということは折にふれて語られる。また昨今の世界的な潮流として公的な領域が縮小され社会保障費が削減される一方で、キューバが貫いた姿勢がその潮流への対照的な例として賞賛の的になることに、筆者もしばしば加担してきた。しかしキューバで生きられた個別の生が語られることは少ない。日本においても人気のあるトピックであるだけに、この作品がもつ潜勢力は日本の読者の心を揺さぶるのではないだろうか。

#### 試訳

(第4章 p. 160-161 抄: ペドロ・フアンの視点による工場の記述。)

缶詰工場で働く連中は混沌と喜びのためにのみ集中して才覚を発揮した。建設労働者と同じく、かれらは仕事をさぼるためならあらゆることをした。さぼるというより放棄に近い。たくさんの女たちがいた。若いものから中年のものまで。多くは女だった。建設労働者と懇ろになって、奥の、豚のゴミが貯まった場所にしげこんでいた。その場所を連中は「ヤレル場所」と呼んでいた。そこは広く離れている場所で、鉄のカートと臍物の残り、骨、排泄物の詰まった臍物、中身の抜かれた頭を詰め込むいくつかのタンクがあった。廃棄物はすべて腐りかけで、蛆虫やら丸々太ったネズミがたかっていた。腐ったものの耐えがたい臭いがした。(中略)

そこには、その汚いカートの間にはいつもやってる連中がいた。もちろん立ったまんまだ。女たちは前に身をかがめて男たちは尻のほうから女へぶち込む。女たちは夢中で喘ぎ声をあげる。急いで。わずか数分だ。それでおしまい。そのあと各々は仕事の持ち場に戻る。もしその場に先客たちがいたとすると、もちろん男たちはそれを何時間も何時間も歩き回って覗きを楽しみながらマスをかく。

#### (第5章

p.216-218、ファビアンはマタンサスにあるロス・ピノス海岸に数年ぶりに訪れ、工場に下放されてしまったわが身を嘆く)

ファビアンは岸辺に打ち寄せる波の音を聞きながら、砂の上に立ち、考えた。「僕の人生に何が起きているっていうんだ。もし神様を信じていたり、聖人を信じていたら

、母親のロシアみたいに祈ることもできたらうに。祈って、誓いを立てて、ピアノの道に帰れるように頼む。吐き気がするあの工場を出て、常軌を逸した下劣な連中に背を向ける。連中を地獄の業火に燃えるがままにしておく。でも僕には友達も聖人もいない。どうすればいい?

なににもできやしない。叫ぶ。でも叫ぶ力も残っていない。僕は臆病で腰抜けの間抜け野郎だ」

ふいに何粒かの涙がこぼれた。心を清めるため泣きたかった。しかし泣き出すことはできなかった。もう彼には涙もなく、何も清められない。

涙は抑え込まれていた。起き上がり、家に向かって歩き出した。人前で、通りにはいたくなかった。彼は誰も見たくなかったし、見られたくもなかった。歩く力も尽き、自分の中に閉じこもり、心の中に抑え込まれた何かを感じていた。(中略)

次の日、月曜日、ひどく手間取りながらも六時半に起きだし、服を着てバスに乗り込むために家を出た。そうして八時前にタイムカードに判を押すのだ。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/fabian-y-el-caos>